

私たちは児童生徒一般すべての人々の書写の環境を整え、豊かな心を取りもどすため総力をあげて「手書き文字の振興」に取り組んでいます。



- 一、日本の伝統文化芸術を守り育もう
- 一、すばらしい日本語の心を伝えよう
- 一、心を映す文字をより大切にしよう
- 一、書く楽しさ喜びを通して健やかな心を養おう
- 一、美しい文字で潤いのある豊かな人生を送ろう



私たちは「日本の書道文化」のユネスコ無形文化遺産登録を応援しています。

豊かな心は手書き文字から

寄稿

文部科学省
初等中等教育局長
藤原 章夫 氏



新しい学習指導要領は、小学校では令和2年度から、中学校では令和3年度から全面実施され、高等学校では令和4年度から年次進行で実施されました。小学校及び中学校の国語科においては、文字を正しく整えて書くことができ、学習活動や日常生活に生かすことのできる書写の能力を育成することが重要です。

ICT 効果的活用を目指す

指導要領には、第1学年及び第2学年の指導事項に「点画の書き方」が新たに加わり、適切に運筆する能力を身に付けられるよう、水書用筆等を使用した運筆指導を取り入れるなど、各学校において、早い段階から硬筆書写の能力を高めるための関連的な指導を工夫

文字・活字文化振興法の骨子

【目的】

文字・活字文化の振興策を推進し、知的で心豊かな国民生活および活力ある社会の実現に寄与する。

【基本理念】

国民が等しく豊かな文字・活字文化の恵みを受ける環境を整備する。国語が日本文化の基盤である

ここに配慮する。学校では「言語力」をはぐくむ。

【責務】

国や地方公共団体は文字・活字文化の振興策を策定し、実施する責務がある。

【地域での振興】

市町村は公立図書館を設置する。

していただくことが望まれます。中学校では、例えば第3学年において、「身の回りの多様な表現を通して文字文化の豊かさに触れ、効果的に文字を書くこと」を指導することとしています。文字を手書きすることの意義に気付かせ、文字文化に

も、共通必修科目「現代の国語」に「言語文化」の「書くこと」に関する指導において、効果的に文字を書く機会を設けることとしています。高等学校芸術科書道では、中学校国語科と連携した指導の関連を図るとともに、表現と鑑賞の学習活動を通して、作品を構想し表現を工夫したり、作品や書の下書きや美しさを感ぜたりしながら、生活や社会の中での文字や書の働き、書の伝統と文化について理解を深める学習の充実を図っています。各学校ではこうした学習指導要領の内容を受けて、

関する認識を形成させるとともに、主体的な文字の使い手になるきっかけをもたせることを求めています。また、多様な文字やその表現の在り方に関心をもち、文字の芸術性に関心を向ける素地を養い、高等学校芸術科書道への接続も見通しています。高等学校国語科において

児童生徒の実態に照らした学習活動が進められているものと承知しておりますが、こうした中で、社会のデジタル化は急速に進み続け、学校現場においてもGIGAスクール構想のもと、1人1台端末等のICT環境が整備され、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を図り、

国や地方公共団体は司書の充実など人的体制を整備し、資料の充実を図る。学校図書館を開放する。

【国際交流】

文字・活字文化の海外への発信を促進、翻訳の支援をする。

【文字・活字文化の日】

国民の関心と理解を深めるため、十月二十七日を文字・活字文化の日とする。

教育の質の向上につなげていくことが求められています。1人1台端末を基盤的なツールとして最大限活用していく必要があります。活用すること自体が目的化してしまわないようにしながら、直面する課題を解決し、あるべき学校教育を実現するための有効なツールとして、これまでの実践と最適に組み合わせる効果的に活用する姿勢で臨むべきであると考えています。社会や学校を取り巻く環境が変化する中、学習指導の場面に応じてICTの効果的な活用を図りながら、子供たちに求められる資質・能力を育成していく上では、我が国の伝統や文化の中で育まれてきた文字文化を大切に、その豊かさに触れる機会を設けることが大切です。公益社団法人日本書芸院が実施している様々な取組も、子供たちが文字文化に触れる機会として大きな役割を果たしていると言えるでしょう。今後とも日本書芸院の活動が我が国の伝統的な文字文化の継承・発展に一層寄与されることを期待しています。

『書くよるこび』16号座談会

近現代の日本の書を考える

— 展覧会芸術としての視点から —

現代日本の書は、明治時代における六朝書風への開眼や上代様仮名の隆盛などを起点として始まりました。大正期をへて昭和期に入ると、広い会場に展示することを前提とした展覧会芸術としての、新たな書の表現が模索されるようになっていきます。漢字では金石の書にもとづく新風、明末清初期の行草作品が流行し、仮名では大字による表現が志向され、専門の書家による表現の可能性がさまざま

に追求されてきました。「近現代の日本の書を考える—展覧会芸術としての視点から—」をテーマに、近現代の中国の状況にも目を向けながら、明治時代以降、現代に及ぶ日本の書について考える座談会を開催。研究者を交えて、活発な意見交換が行われました。

(座談会は令和4年12月7日に東京都内で行われました。出席者の肩書は当時)

会場芸術の「書」発展めざす



中村(伸) 先生方、ありがとうございます。『書くよるこび』16号の座談会として、「近現代の日本の書を考える—展覧会芸術としての視点から—」という企画を考えまして、本日は、お二人の専門家の先生、名児耶明先生、高橋利郎先生をお招きしました。

日本書芸院側からは土橋靖子理事長、中村史朗常務理事にも加わっていただきます。広報部担当の私、副理事長の中村が司会進行をさせていただきますので、よろしく願っています。

最初に、理事長からご挨拶をお願いしたいと思います。

土橋 本日は、大変お忙しい中ご参集いただきまして、誠にありがとうございます。今回は中村伸夫先生からお話がありましたように「近現代の日本の書を考える—展覧会芸術としての視点から—」ということで、私たち日本書芸院の会員は皆、筆で文字を書くのが大好きな会員ばかりだと思います。そういう方たちにとって一番身近なテーマではないかなと思って、今日は大変楽しみにして参りました。

特に書学、書道史専門のお二人の先生、また、常務理事の中村先生、司会の中村伸夫先生も、どちらも大学で教鞭をおとりになっていて、作家活動だけにとどまらず、いろいろなふだんからご研究をなさっていらっしゃる

と。先生方が一様に驚かされる大きなテーマです。「近現代の日本の書を考える」というテーマですから、つかみどころのない感じがしますけれども、展覧会芸術、あるいは会場芸術としての視点から、という切り口を一つ設定するだけで、明治以降、150年以上になる現代までの日本の書を、こういう切り口で考えてみるとどうなるか、という実験的な座談会を企画しました。

展覧会というものが無い時代、江戸時代や室町時代を考えるとみれば分かるんですが、書というのは、お茶室であるとか、文人の書斎であるとか、お寺の控室とか、そういうところに飾られて、特定の人たちのみがその状況に応じて鑑賞していたという過去があります。

ところが、明治以降、大正、昭和になって、従来のあり方と併存して、主義主張を同じくする団体が個々に展覧会場で展覧会を開催するようになりまして、そして、それを鑑賞するために出向くようになったわけです。あるいは、今の日展や読売書法展のように全国規模の公募展という形が加わりますと、美術館に足を運んで、不特定多数の書を全く知らない人たちが、もちろん書家とか様々な人たちが会場に来て作品を鑑賞することになったわけです。

そうなりますと、作品が飾られる場所や見にくる人が変わりますので、当然、作家として書を作る側の表現の態度といえますか方法も、茶室の中に飾るのではなく、大きな会場に飾られるという前提で作品を書くということになった、ということが考えられるわけです。

例えば、昭和期に入りまして、後ほど理事長からも制作者としてのお話を伺いたいんですが、大字仮名というものが盛んに行われて、これが今日定着しております。これは、その典型的な一つの事象だと思うのですが、今後も続くこの展覧会芸術としての書というものが、彫刻や絵画や工芸美術などの他の芸術と同じように、日本の社会の中で力強く根づいていくためには、どうしても展覧会芸術としての書というものが大きく成長し、過去の伝統をふまえた進路が課せられていると思います。今日は、そういう将来に向けてのヒントを先生方から得たいということ、この座談会を企画した次第でございます。限られた時間ですが、どうかよろしく願っています。

まず、最初に、現代に至る近現代の書の起点として、どうしても江戸時代から明治時代になってからの最初の状況がどうだったか、ということ振り返る必要がありますので、一つの見方として「六朝書風の展開」、これは漢字のほうですが、仮名のほうでは「上代様仮名の隆盛」ということについてお話しただきたいと思っています。最初に、明治期の漢字の書の状況について、この時期のことを詳しく研究され、論文も執筆されている中村史朗先生からご発言いただきたいと思っています。

中村(史) 今、中村伸夫先生の指摘いただいた内容言いますと、一般に言われるのは、明治13年に清国公使館の随員として楊守敬という人が来日して、多くの碑版法帖をもたらし、日下部鳴鶴とか巖谷一六といった日本人の書家が交流を重ねるうちに新知識を得て、それが近代日本書道の起点になったということですが、それはたしかに事実で、以後、日下部鳴鶴が専業書家になり、明治の後半に至ると、いわば明治書壇の領袖のような存在になります。

できてきて、明治政府は美術を制度化していくわけですね。その「書ハ美術ナラズ」の論争の内実はともかくとして、以後の流れにおいて書は、いわゆる美術世界というか美術制度からは、どちらかというと外に置かれるようになります。

ですから、六朝書風が構築されるというのは(書道史的に言えば「六朝」というネーミングがちょっとおかしいかなと思うのですが)、私たちが俗に言う「六朝」というものを新しい書として認識するようになるということと、書が社会的にどのような位置づけられるのかというのを対比的に見ると、座談会に別の視点が見えるのではないかと考えて今日は参りました。

たとえ説明されることが多いですが、御家流が唐様に変わったというよりは、文字言語の基本である御家流は、近代を迎えて活字に置き換わります。肉筆版下から活字へと時代がやってきて、御家流はその役割を失っていく。

次は今回のテーマの一番中心的なことになりましたが、昭和に入ってから、例えば昭和23年に日展に書が加わります。それが一つの大きな戦後のきつかけとなって、日本の書が現代まで会場芸術、展覧会芸術としての動きを進めてくるわけですが、まず、漢字の場合は、これをさっくりと大きく分ければ、関東は金石の書に基づく新風がほとんど大化して展覧会芸術として広がりますし、関西は特に明末清初期の作風に関連する行草書の大作が飾られるということが行われるようになりました。

高橋 日展などの大規模な公募展は東京都美術館で開催されてきました。東京都美術館が東京府美術館として開設されたのが大正15年です。豊道春海の運動があって、日本書道振興会展がここで開催されました。この頃から書の西洋的な建築の壁面への対応が始まっています。

中村(史) その辺は、今現在で判断するのはなかなか難しい問題だなと思います。現代における篆隸書風が徐々に緒に就くという一方で、この明清書風というものが関西を中心に展開されるようになるということですが、実際の書道史の流れで言えば、清朝で碑学の書というのが生まれてくる背景は、書論的に言えば王羲之書風というものを勉強してきたけども、勉強の仕方が形骸化してきたので、新しい観点でそのような碑版を取り入れて勉強しようじゃないかという、そこが一つ起点であったと考えています。

仮名の美しさ見直す

中村(伸) 明治の初めの「六朝書風の展開」ということについてお話ししたとき、仮名の方では日本書道史の概説書を見ますと、上代様が非常に隆盛を極め、後の展覧会芸術の問題とは直接結びつかないんですが、明治時代の上代様仮名の隆盛について、名児耶先生からお話ししたいと思います。

和歌などの仮名だけの作品というのを意識して、どう表現しようかと考えたときは、やっぱり仮名で書いてある古典に目を向けたということがあるのかなと思います。

中村(伸) ありがとうございます。今の点について、高橋先生、お願いします。

高橋 確かに仮名に対する意識が高まった時代だろうと思います。一つは御家流の終えんです。御家流が唐様に置き換わ

中村(伸) 高橋先生からは、金石、あるいは新出土とかの書に関連するお話をうかがいました。中村史朗先生、先生は村上三島先生の系統に所属されている作家ですが、この明末清初の作風が一世を風靡するほどに流行しなければ、関西の書道界の隆盛はなかったのではないかと、私は勝手に思っているんですが、先生はどうかお考えですか。

中村(史) その辺は、今現在で判断するのはなかなか難しい問題だなと思います。現代における篆隸書風が徐々に緒に就くという一方で、この明清書風というものが関西を中心に展開されるようになるということですが、実際の書道史の流れで言えば、清朝で碑学の書というのが生まれてくる背景は、書論的に言えば王羲之書風というものを勉強してきたけども、勉強の仕方が形骸化してきたので、新しい観点でそのような碑版を取り入れて勉強しようじゃないかという、そこが一つ起点であったと考えています。

座談会出席者

名児耶 明

筆の里工房副館長
(専門は古筆・書文化研究)

高橋 利郎

大東文化大学文学部書道
学科教授(専門は日本書
道史)

土橋 靖子

本院理事長

中村 伸夫

本院副理事長

中村 史朗

本院常務理事

名児耶 やはり、中国の書の古いものを見ようという刺激を受けたのかもしれない。国文学の中心にして、仮名の美しさを見直そうという動きがあるって、古筆に注目していきま

中村(伸) ありがとうございます。今の点について、高橋先生、お願いします。

高橋 確かに仮名に対する意識が高まった時代だろうと思います。一つは御家流の終えんです。御家流が唐様に置き換わ

中村(伸) 高橋先生からは、金石、あるいは新出土とかの書に関連するお話をうかがいました。中村史朗先生、先生は村上三島先生の系統に所属されている作家ですが、この明末清初の作風が一世を風靡するほどに流行しなければ、関西の書道界の隆盛はなかったのではないかと、私は勝手に思っているんですが、先生はどうかお考えですか。

中村(史) その辺は、今現在で判断するのはなかなか難しい問題だなと思います。現代における篆隸書風が徐々に緒に就くという一方で、この明清書風というものが関西を中心に展開されるようになるということですが、実際の書道史の流れで言えば、清朝で碑学の書というのが生まれてくる背景は、書論的に言えば王羲之書風というものを勉強してきたけども、勉強の仕方が形骸化してきたので、新しい観点でそのような碑版を取り入れて勉強しようじゃないかという、そこが一つ起点であったと考えています。

中村(史) その辺は、今現在で判断するのはなかなか難しい問題だなと思います。現代における篆隸書風が徐々に緒に就くという一方で、この明清書風というものが関西を中心に展開されるようになるということですが、実際の書道史の流れで言えば、清朝で碑学の書というのが生まれてくる背景は、書論的に言えば王羲之書風というものを勉強してきたけども、勉強の仕方が形骸化してきたので、新しい観点でそのような碑版を取り入れて勉強しようじゃないかという、そこが一つ起点であったと考えています。

(4面に続く)



名児耶 明氏



中村(史)

(3面から続く)

だと考えています。

戦後になって村上先生が王鐸に着眼されて、大阪、兵庫を中心に、いわゆる明清書風が非常に流行するようになった。一方、

関東・関西志向の違い

中村(伸) 名児耶先生、どうですか。関東と関西の書の近代以降の志向はかなり違うように思われますけれど。

中村(伸) 今のは、漢字の話なんですけど、形式から言いますと、漢字の作品は本来は書物的なもので、ちょっとずつ、30ぐらい開いて書を書き、前の残影と、今見ている所と、そして次にどうなっていくかという期待のようなものを抱きながら少しずつ、読みながら鑑賞したわけです。

掛け軸という縦形式の大きなものになりますと、一瞬にして全部見えてしましますので、鑑賞する側も、あるいはそれを書く側も、何かそれまでとは大きく違った手段や発想、意味合いが生まれたのではないかと思っています。

だから、今、中村(史)先生がおっしゃるように、関西ではもともと日本で勉強してきたものの上に刺激を受けて書いていくというイメージなのかと思います。

江戸時代、唐様が盛んであったと思いますが、江戸後期になったときには、唐様というのが何か形骸化しているというか、そういうところが見えてきて、新鮮に感じるものを取り入れようとする。そこには自分たちが伝統的にやってきた上と考え

京都はどちらかというと、その平安書道会の流れをくみながら現代書を考えるという雰囲気だったから、古谷蒼韻先生も明清書風を全面的に受容しようというより、王羲之の骨格にどのよう展開が考えられるのかとい

う観点で、作品を書いておられたような感じがしています。日本書芸院の先達は多士済々で、それぞれの先生と明清書風との距離感みたいなところを測りながら見るのがかえって楽しいですね。

眺めてもらうために書いたわけですね。

精密な臨書よりも、見て面白というのか、見てアピールする書というものを、あえて作ったという要素が大きかったのではないかと思っています。

名児耶 大きな字というのは、墨蹟などには、道号など大きな字を2文字書いたものがあります。あれは特別なものだと思います。しかも大体は、横物ですね。多分中国から入ってきたときの墨蹟は、日本のものより普通に考えた大きな字ですが、縦のものは、ほとんど

なかったと思います。

室町時代後半の『君台観左右帳記』を見ていると、お茶席というのは、基本的に書院とか広間とか広い部屋で、掛け物は水墨画など絵が中心で、二幅対以上なんです。書は、その賛としてあり、一幅で掛けるという例はないです。一行というのか、縦に大きいのがあったかどうかはちょっと疑問しいと思います。

つまり、伝来の墨蹟を見ていると、書状や巻物など横物です。茶席の形態の変化や需要する側の都合などの流れがあって、大字になっていったのではないかと思います。江戸の唐様のルーツみたいな黄葉宗の書なども、日本に来てから当時の状況に合わせて、大字や一行書が生まれていると思うのです。大徳寺でも、縦の大字は桃山時代の終わりからです。

々な面白い指摘をいただきました。なるほどと思うことがたくさんあります。漢字と同時に、日本では仮名があつて、その仮名こそ日本文化における書の精神だと思わなければいけません。

先ほど「上代様仮名の隆盛」というので、明治期には非常に古典的なものを尊重して書いた仮名があつて、平安古筆に基づく大字仮名運動が昭和になってから非常に盛んになりました。

当然、日展とかの大きな会場で、不特定多数の人が、いわば靴を履いたまま仮名の作品を見に来るという状況の中で生まれてきたわけですね。



神戸の先生も京都の先生も非常に何か近いものを感じるのですね。そんなところからして、やはり皆さん、先生方がスクラムを組んでこの大字仮名運動に力を注いでいたということがよく分かります。

また、作家、筆を持つ側として感じるのには、何事でも黎明期というのは、仕上がりだの、それからテクニクだというのは、非常にまだ未消化の部分があると思うんですが、その黎明期ならではの作品の持つエネルギーというのかな、こんなこと怖くて書けないというような、驚くほどのパワーを感じる。黎明期ならではの気力に満ちた何か新しいものを作っているという、そういう作品が大変多かったように思っていますね。

その辺から見ると、もちろん何よりも、線が大事ですし、テクニクも大事ですけども、あらためて作品というのは「氣」が大事なんだなということも、黎明期の作品を見ます感じることですね。

あと、先ほど、漢字の碑学派、帖学派ということについて、完全に分かれていたのではなくて、王羲之の修正意見であるということも中村史朗先生からお話がありまして、大変これ、私も勉強になったんです。仮名になぞらえると、例えば『高野切』の一種、これは王道、漢字で言えば王羲之のような王道と私は考えています。中庸の美は、個性がはつきりしない。それだけに、実はとても取りつく島のない難しさがある。

それに比べて、漢字で言う明清となれば、仮名で言えば院政期の仮名、『香紙切』であるとか、そういった非常に華やかで



高橋 利郎 氏

日展史の、当時の頃の作品

もう一つ面白いのは、今の時点では、いわゆる社中というところで、作品の個性が非常に明解になってきていると思うんですが、その当時、昭和30年代から40年代の初めぐらいまでの先生方の、特に西の仮名の先生方の作品を見ていると、会派の垣根というのが今ほど感じられないんですね。

作品は「氣」が大事

作品は「氣」が大事

軽快で、そしてドラマチックで非常に動きのある、そういう古筆に置いて換わって考えることができるんじゃないかなと思うんですね。

当然、好みや方向性の違いにより、特に院政期の仮名を主によくなさる方もおられる、どちらかというと、そちらの方向にあまり寄らない方もおられるし、それぞれ、やはり自分の得意とするところ、興味を持つところがあつたに思いますが、おおむね大字仮名においても、院政期の仮名を軸にした作品というのは、そのまま作品を大きくしても比較的变化がつきやすい。ところが、漢字と言えは王羲之、仮名と言えは『高野切』などの、非常に中庸な、いわゆる滑々とした美しさ。そういうものを大きくしても、これは全く作品にならない。そこで、どうしても必要になってくるのは、漢字の構築的な力強さなり構成だと思ふので。

いずれにしても、やはり線というものは大事なので、とどのつまりは、仮名の源流であるところの王羲之です。DNAが流れているということで、そこに回帰して、そこから、学ぶ必要を私は感じています。

すっかり古典を学んでいれば、多少、デフォルメをしたり、いろいろしても、絶対にたがは外れないんだと。そういうところまで古典を自分のものになければいけないし、その辺のところ、大字仮名の、これから特に必要なんじゃないかなと思ふところがあります。

中村(伸) ありがとうございます。私、大学時代に森田竹華先生に2年間仮名を教わったんです

が、特に最初の1年は、『高野切第三種』だけしか学ばせていたわけなくて、それで大字仮名の宿題で、半切に『高野切第三種』を2行で書くのが出たんです。『高野切第三種』で大字仮名をつくるということも、私には無理でした。

先生がおっしゃる通りに、院政期のものとか、あるいは宮本竹逯先生の本を読みますと、『関戸本古今集』は、筆の角度や強さや突っ込みがあるので、あのまま大字にしてもいいけるというようなことが書いてありまして。

大字仮名というのは、古典を尊重すると同時に、古典から脱皮しようとする立場というものが、今の作家の中にはあるような気がします。今年の日展の先生の作品を見ても、古典的な要素が地金のようにあつても、それから脱皮して自分の大字仮名をつくらうという意欲がはつきりと表れていると思うんです。

大字仮名は、特に会場美術の書として非常に重要な領域だと思っています。

名児耶先生、今のお話はいかがですか。

名児耶 理事長がおっしゃったように、仮名と言えは、もっとも尊重されるのは『高野切』の一種ですね。私の考えでは、多分『高野切』の一種というのは、仮名の表現をしていく書き方で言うところとちよつと別格で、仮名の本来の流れの中からちよつと突出したものだと思います。

今の会場などで見ても、『関戸古今集』を習った人は、かなり多いと思ひます。『関戸古今集』は、筆がやや傾いて、線が太くなつたり細くなつたりして、変化をつけやすい。1字の中でも、だ

が、『高野切』の一種とか『升色紙』を見ると、均一の細いものがずっと続くんですよ。あれは、ちよつと普通じゃできない。均一の線でありながら、全体を太く書いたり細く書いたりする強弱のつけ方を、大字仮名のようにするのは、本当に難しいと思ひます。

その点、『関戸古今集』系統というのは、実は、仮名が生まれて、表現がいろいろなものになつたときの一番の基本の流れだと思ふのです。この系統が、おっしゃる通りに、院政期にもつながるのだと思ひます。

実は、『関戸古今集』は、今までの考えより時代が古いと思ふのです。『高野切』よりも古いかもしれないと思ひます。実際、紙の制作年が1000年頃と判明している『未詳歌集切(古今集切ほか)』という断簡が6点あります。それらの線をよく見ると、『関戸古今集』の系統と似ている。この料紙が1000年の頃なのです。

そういう流れにあつて、仮名の王羲之とも言える『高野切』は、仮名の歴史の流れの中で特別なものですから、そのまま大

きくするのは、無理だろうなと感じています。挑戦するのなら、よく線を見て、どういう筆の使い方をしているのかと考える必要がある。漢字と違って仮名は、小さい筆を使つて、細い線で書きます。曲線主体です。それを急に太くしたりすると、イメージがついてこない。だから、全体に太くして均一に書くということができない。均一に書くことが漢字に負けない線になつたら可能なことであつて、用具の発達というか、改良というか、そういうのがないと、なかなか難しいかなと思ひます。

ただ、大きな字を書いている例で言うと、江戸時代にもあるのです。近衛信尹(三藐院)あたりは、実は大きな仮名を書いています。また、当時の天皇の半切で、和歌2行書きの大字仮名を見たことがあります。京都のある骨董屋さんが掛け物を見てくれというので、出かけましたら、京都で見えたものでした。あつ、あそこからここに移動したと思つたと同時に、この人のところに入つたということ、はポストンに行つちゃうのじゃないかなと思ひます。



土橋 靖子 氏



いかなと思つたのです。その後、ある人とポストンに行く用事があつて、書を集めているコレクターが、「名児耶さんが来るなら、書を見せたい」と言っているというので行きました。もう90歳ぐらいの老人3人。こんなものを最近手に入れたと言つて見せてくれたのが、まさに2行書きの和歌だったのです。彼らは、漢字仮名を読めないし、書けないのに、書の良いものを集めているのです。つまり、日本人は気がつかないかもしれないけど、外国の人が見ている、仮名の大きなものに対する魅力を感じたのでしよう。びっくりしましたよ。思つたとおりのこと

迫力ある大字仮名 世界に発信

中村(伸) 今のことと関連しますが、もう30年も前ですが、中国の書家の訪日団が来られていまして、僕がたまたま展覧会に案内することがあり、仮名作品の部屋をお見せしたんです。そうすると、漢字の国の人たちですから、小さい仮名だけの作品にはあんまり見向きもされなかった。ところが大字仮名はすごく魅力を感じたみたいで、熱心に見られるんです。ところが、その部屋が終わつて、小さい仮名の部屋にはいると、もう全然見ていただけない。

だから、大胆な漢字的要素もある大字仮名のほうが、世界的には非常にアピールできるのだ、今度の万博も先生に大字仮名を書いてもらつて。

名児耶 そう、同じことを感じたことがありました。ある人が中国の若い人を連れて美術館に来たのです。墨蹟を見せられと言われたから、見

あつて、書を集めているコレクターが、「名児耶さんが来るなら、書を見せたい」と言っているというので行きました。もう90歳ぐらいの老人3人。こんなものを最近手に入れたと言つて見せてくれたのが、まさに2行書きの和歌だったのです。彼らは、漢字仮名を読めないし、書けないのに、書の良いものを集めているのです。つまり、日本人は気がつかないかもしれないけど、外国の人が見ている、仮名の大きなものに対する魅力を感じたのでしよう。びっくりしましたよ。思つたとおりのこと

とになっていることにも。また、漢字仮名交じりで漢字が少ないものが歴史的にあるんじゃないですか。ああいうものの中に、何か新しい大字仮名を書くヒントがあるのではないかなという気がします。どうしても平安の古典が目行つて、そこだけで考えているけど、実は、漢字と仮名を書いたのは御家流にもあるし、いろいろな時代にあるわけなんです。それらを参考に、自分が習った古典を取り入れていくと、何か新しい表現ができないかなということを感じておりましたよ。思つたとおりのこと

紙がもつたいいです。にじむのをやり始めたのは、副島蒼海とかあの頃からです。だから、今は漢字のほうの話になって申し訳ないけど、にじむを使つとか、ほかとか、いろいろなことやっていっているのは、あれ近代の感覚だと思ひます。

土橋 先ほど、楊守敬が明治十何年来日して、そこから非常に大きな影響を与えた。どこかで読んだんですけど、楊守敬が水筆をもたらしただけなのも、それ確かでしょう。

それこそ京都の学派など、比較的筆を根元まで洗わずに固まったような状態を好む派と、逆に変化の出やすい羊毛などの筆を全部捌いたものをお使いになる派があるように思ひます。これは楊守敬の影響なのではないかな。

中村(史) 楊守敬がどうか分らないですけども、日本へは当然中国から筆が来たわけではじめは巻き忌筆という芯

土橋 紙はそうですね。名児耶 だって、にじんだら、

(5面から続く)

がある筆を両国とも使っていて、唐代の後半ぐらいにほぼさばき筆みたいなものが中国では定着して、日本は、どちらかというとさき芯のものを日常的には使用し続けてきたのだと思います。

先ほど出た御家流の手習いでは巻芯が基本で、この筆には言わば筆ペンの機能が備わっています。ですから、教育に非常には有意義だったということがあるのではないのでしょうか。幕末までに日本は庶民教育の水準が非常に上がって、そのことは、一つにはこの巻芯筆の性能ということが大きく関係しているんだと思うんですよね。要するに、辛亥革命頃の中国と明治・大正の日本だったら、もう相当に庶民の書く能力が違っていたのですが、それは簡便な筆が学ぶ力を支持してきたということがあると思うのです。

一方、水筆(さばき筆)とい



うのは、表現のためにどうするかという面が強く、楊守敬はこういう筆でこう書いたよというの、いろんな場面で鳴鶴や一六に伝えていて、それは筆談で随分残っているんですよ。かなり鋒が長く、根元が固まっていな筆でやりくりしないと書けない書法を伝えていて、それが鳴鶴には非常に新鮮だったんです。それが鳴鶴流の「六朝書道」の基盤をつくります。

土橋 そうですね。それで、比田井天来先生とか……。

中村(史) 天来先生の系列の方は、今の毎日書道展に多くいらして、筆のあちこちの面を駆使する技法が主になっているのではないのでしょうか。

やや専門的ですが、楊守敬が鳴鶴たちに伝えた技法は、実は碑学派の筆法じゃなかったんですよ。なのに、鳴鶴たちはよく分かって、その技法で例えば篆隸の書を書おうとしたのですが、あまり成果がなかったのです。

実は、目下部鳴鶴の楷書と行草書について言えば、よく調べてみると、幕末の貴名松翁の技法と非常に似ているんですね。

鳴鶴の隸書は、楊守敬が伝えた特有の書き方で、三国時代の魏の隸書の書風をベースにして、漢碑ばかり習っていたら駄目だよというアドバイスには鳴鶴にとって隸書の学習が第一歩から分かっていたんですね。鳴鶴の中国風の書風という



中村 伸夫 氏

のは、湯島天神なんかにある、あの隸書のみだと私は考えています。

高橋 少ないですね。基本的には行草で、貴名松翁の帖書の流れですね。

中村(史) それで鳴鶴の一つのジレンマであって、偉くなくてからいような人にそのことを指摘されるようになり、あとに直接に清朝の名家に教授される日本人が増えて、楊守敬以来の知識が見直されるようになったことがあります。

高橋 碑を書くために北碑を学習するという側面もあったのだらうと思います。

名児耶 筆のところに關係しますけど、今の水筆は、日本では基本的に幕末からですからね。世田谷の等々力に満願寺というお寺があり、唐様で知られる細井広沢の墓があります。そこに、広沢が作らせた水筆があるのです。

日本でも、どの時代もいろんな筆を使っていますよ。蘆筆や竹筆があり、大字用の水筆は多分輸入品だったと思います。

ただ日本は基本的に巻芯筆、芯がある筆で、仮名なんかもその典型ですよ。芯がある筆だから

ら、あのぴりっとした線ができるので、あれを水筆のやろうと思つたら、なかなかできないことですよ。やっぱり、用具というのが、かなり大きく影響すると思います。

中林梧竹が王羲之の草書を一生懸命臨書して、最後に短鋒に行き着いたという話は有名です。あれはよく考えたら……。王羲之の時代は、もともと芯がある筆で書いていたから、短鋒で書いたほうが、王羲之の使用筆に近く、それらしく書けるのは当たり前のことです。つまり、用具も重要じゃないかなと思うのですよね。

中村(伸) こういう話の広がりこそが実は価値があると思います。様々なことに気がつきますので。ただ、時間もありませんので、先に進みたいと思います。

我々は、展覧会芸術としての書の制作を主にやっていました。全てが展覧会のための書というわけでもないんですが、例えば私などは会場芸術としての作品を作るのが当たり前になっていました。1年のローテーションの中で、何々展にこれを書いて、何々展にこれと、大きな作品ばかり1年間書くようになっていきます。しかし、茶室や書斎にひっそりと置かれた書の価値も、僕は非常にすばらしいものだと思います。

ついでに、真神鏡堂先生の京都での陶芸作品とのコラボの展覧会がありまして、僕は、純粹な日本の書の展示の一つの方向を示しているなと思います。

お茶室に飾るような少し小さな作品が30ぐらいあったんですが、いわば、お茶室を

10室ぐらい合体したような感じがして、すごく雰囲気がありました。大きな会場の展覧会とはまた違った、忘れてはならない一つの方向として、作家の表現の幅の広さを知るためにも、先ほど理事長もおっしゃっていたのですが、いつも見ている真神先生の、いわゆる、林を着た表現ではなくて、普段着の表現と言ったか。そういう部分も書では非常に大事ですので、いいヒントを与えてくれる展覧会だったと思います。

ここからは、お一人ずつ、総合的なお話をしたいと思います。日本の伝統文化としての書が、主として展覧会芸術として一般の方々にも受け入れられる魅力ある芸術の場にするために、何でも構いませんので。名児耶先生から順番に。

と思います。

高橋 大字仮名は、「運動」によって確立された表現で、これは日本書道史上とても珍しい例です。誰かの作風が起点となつて流行して拡散した表現ではなく、大字仮名を根づかせなければという意志を明確にしてできたのです。いずれも書芸院の中心で活躍した、いわゆる「七人の侍」を中心とした人たちが昭和10年ごろからすでに工夫をはじめていて、関西書道会あたりで発表しています。安東聖空が条幅研究を盛んに展開して、仮名特有の美を模索しています。もちろん反対もあって、例えば辻本史臣は、仮名は小さいからこそ美しいと言っています。同様の考えだった尾上柴舟の存在が大字仮名の出現に抑制

展示方法 多様な工夫

名児耶 基本的に、展覧会で発表する作品、その行く末はどうなるのでしょうか。つまり、展覧会で発表して、その作品が心で打つもので、所有したいという人が出てきて、飾りたいということになるのが、まず本来かなと思うのです。

展覧会での大字の作品、特に大字仮名については、逆の話で申し訳ないのですが、会場だけのために大字を書いていて本当

にいいのかなということに疑問があるのです。つまり、大きさをもうちょっと工夫して良いのではないか。大きいのも必要ですけれど、大きくしなきゃいけないというのではなくともよいかと思えます。確かに過去に大きくて必要なものというのは、お寺の額や看板、その他に昔からあります。

会場での大型の作品の工夫、やり方はいろいろあると思います。

会場に合わせて表現

ようなものというの、もちろんと会場の中で見えてきたらいいのかなと思うのです。個人的には、部屋に飾れる範囲での大字仮名が一つの基準か

と。例えば、お一人ずつ、総合的なお話をしたいと思います。日本の伝統文化としての書が、主として展覧会芸術として一般の方々にも受け入れられる魅力ある芸術の場にするために、何でも構いませんので。名児耶先生から順番に。

をかけたと言われますが、戦後には、大字仮名の発達はもう不可逆の状態にありました。柴舟没後に展開した大字仮名運動でこれが全国に広がって定着して、60年以上かけて深化してきました。

同様に、明清的な表現、金文、前衛など、いずれも戦後すぐに確立された様式が現在に向かって深まりを見せているんだと思うんです。これまでにない新たな様式を見いだすことは、今日ではなかなか難しいと思います。書家でなければできない深い表現を追求していくことが必要なんじゃないかと思えます。その深いものを理解する鑑賞者を育てる必要もあるでしょう。

そのためには、かすかなものを理解できるような心持ちを大切に評価できるようにしたいですね。多くの作品が展示される展覧会では、初期的には刺激的な表現が衆目を集めます。しかし現在では、すっかりその刺激に慣れてしまっています。

展覧会も成熟してきていますので、ある程度経験を積んだ人でなければ分からないようなかすかなものを大事にしたい。専門家の先生方は、そういった「紙一重」という境涯で勝負されています。それを互にくみ取れる目を養っていきたいと思えます。

もう一つ、もう近代と言っても、明治150年を過ぎて、戦後80年を迎えようという時代です。この間に発表された作品が相当蓄積されています。これを改めて振り返るような状況をつくらないといけないと思えます。

私は成田山書道美術館で収蔵庫問題に常に向き合っています。

が、幸いにして全国から近現代の作品をたくさん寄贈していただいています。うれしい反面、成田に相当数の近現代の名品が集まってくるということは、全国的美術館で体系的に書を収集していないことの裏返しでもあります。

本来、公立館であれば、あらゆる芸術分野に目を向けてそれを取蔵していかなければいけない責務があると思います。しかし現状では、ちよっと実態に見合わない面があると思う。

近現代作品を、できればたくさんさんの館で収蔵して、折を見て

振り返るようなチャンスをつくっていく。それが一般の鑑賞者をつくることにもつながっていくのだらうと思います。

同時に、明治以降の書は一点も重要文化財に指定されていないんですよ。もう少し前、江戸の唐様くらいからほとんど全部

振返れるようなチャンスをつくっていく。それが一般の鑑賞者をつくることにもつながっていくのだらうと思います。同時に、明治以降の書は一点も重要文化財に指定されていないんですよ。もう少し前、江戸の唐様くらいからほとんど全部

書道文化 次の一歩へ

中村(史) 今日の特テーマに沿って言いますと、やっぱり私たちの書の展覧会芸術というのは、ある意味、動きかけの歴史だったなというふうに思っています。

楊守敬来日から今日の私たちというのは、そんなに一脈で通じていないなと思うこともいろいろあります。幾つかの断層みたいなものが存在しています。

さっき話に出したように、大正の終わりぐらい、豊道春海先生を起点とする日本書道作振会が、会場芸術にしませ

さっき話に出したように、大正の終わりぐらい、豊道春海先生を起点とする日本書道作振会が、会場芸術にしませ

さっき話に出したように、大正の終わりぐらい、豊道春海先生を起点とする日本書道作振会が、会場芸術にしませ



中村 史朗 氏

絵画とか彫刻とか、今で言えば現代美術とか、そういうところと伍して展示をやっているか、それはいいけど、そういう責務感みたいなものがあります。今まさに日本書道文化協会というのを

その中で、現代の中国のことにも関心があるのですが、中国は専門家の書道というのが格段に発展していて、日本の低調な状態、学校の専門の先生がほとんどいなくなっていくとか、そういう感じと真反対な状況が起きているんですね。

先ほどの名兄郎先生の話にもあったように、見に来た人が率直に感想を言うとか、それならもう一回見に行こうとか、要するに、鑑賞層という人がそんなに今は育っていない。しかし、世の中で書に関心のある人は、かなりいるなと感じています。その人たちに私たち側の意図をうまく届けられていないな

土橋 一つだけ、私自身が考えていることを申し上げさせていたかと、書というのは、用の美の部分が内包しているもので、書は、つづり、とどめるものから始まっていると思うんですね。日本では平安時代の古筆もそうですし、中国のものも尺牘など、つづるというところから多く始まっている。その辺のところにもう一回立ち戻って、展覧会芸術というところで、そのみ誇張され、文学性を否定したり独りよがりな走りたりすることなく、私たちは進んでいかなければいけないのではないかと思います。

以前ですと、書というのは地味にやっているのがすばらしいみたいなのがありましたし、確かに、派手に目立つことばかりに着目したら、これはもう格が途端に下がりますけれども、そういうことではなくて、もっともっと今あるテクノロジーを使って、できるだけファンを増やす努力をこれからどんどんしていかなければいけないなと、先生方のお話を伺って思ったところでございます。

持している。経済発展と同時に、書のマーケットというのをつくってきいて、成熟した書道文化だという印象を持っています。

じゃあ、私たちは先行していたはずなのに、何が足りないのかということを考えましたら、やはり、鑑賞層を真剣に取り入れてくるということがちよっと薄かったんじゃないかなと思います。

また、「説明能力」という中村史朗先生のお話も、最近でこそ、会場でギャラリートークとか、そういったこともするようになりはしましたが、これからは、ユーチューブとか、現代ならではのいろいろな技術をどんどん使って少し外にアピールする。



の、そういった発生の源の概念を外さないことが、いわゆる日本書芸院の信条である「伝統と創意」をしっかり守る一つの大きなものではないかなと思えます。

また、先ほど高橋先生が、近現代の書について皆さんにアピールする場というところをおっしゃってくださいましたけれど、もう、ありがたいことに、4年後、日本書芸院は80周年を迎えますので、この80周年記念に向けて、ぜひとも近現代の書に焦点を当てて、先生方のお力をぜひお借りして、近現代の書を皆さんにアピールし、ご理解いただき、共に勉強する、そういう機会になったらすばらしいなと、今お話を伺っていて強く感じました。

先進的な書写授業

横浜国立大学教育学部附属鎌倉小学校



分解した「開」を使って位置を決める

令和2年度(2020年度)以降の教育内容を定めた新しい学習指導要領では、ICT(情報通信技術)について、コンピュータや情報通信ネットワークを積極的に活用する機会を設けるなどとして、指導の効果を高めるよう工夫することと規定され、学習指導要領解説では、国語科でも「情報収集や情報発信の手段として、インターネットや電子辞書等の活用、コンピュータによる発表資料の作成やプロジェクトによる提示など、コンピュータや情報通信ネ

ットワークを活用する機会を設けることが重要」となっています。
こうして、政府のGIGAスクール構想に基づいて小、中学校の児童生徒への「一人一台端末」が実現したこと、全国の教育現場ではICTを活用し、様々な工夫をこらした授業が行われています。その中で、学習支援ソフトを効果的に使い、先進的な書写授業を展開している、横浜国立大学教育学部附属鎌倉小学校の荒谷舞教諭の実践を紹介いたします。(写真は一部を修正しています)

荒谷教諭の授業は、22年2月に神奈川県鎌倉市で開かれた全日本書写書道教育研究会の第61回全国大会で、公開授業に取り上げられました。同大会は、新型コロナウイルスの感染拡大でオンライン開催となり、授業の様子は、カメラを通じた生中継で公開されました。

この日公開されたのは、4年生の「漢字の組み立て方の秘密に迫り、実生活にいかそう!」の授業。目標は、漢字の「かまえ」の中の部分の組み立て方を理解すること。児童たちは、事前に、自分の知っている「もんがまえ」の文字を硬筆で書き出し、中、の部分の位置や大きさを整えたりして、整った文字にするための方法を考えます。当日は、「開」の文字を取り上げ、これまでの学習をふまえて、どのようにすれば自分の理想の字形の「開」が書けるのかについて学びました。

最初に、荒谷教諭が、「開」の中の部分を中央に置いたものと下にずらしたものを、大きさを縮めたものの3種類を提示。児童は、それぞれのタブレット端末で、一番整っていると思う文字を選んで送信します。児童の回答は、各端末だけでなく、教壇に置かれた大型モニターにも一覽で表示され、全員が共有できるようにになっています。

続いて、「開」の「かまえ」と中の部分を分離した文字データを使って、「門」の中のどこに配置すれば整った文字になるのかを画面上で試行錯誤。自分の考えで答えを出していき、こうした操作は、タブレット端末ならではの出来るように。全員の回答が出そろったところで、なぜそう考えたのか、発表してもらいます。

それぞれの考えがまとまったところで、児童が筆を持ち、半紙に「開」を試書します。大型モニターに映した動画で正しい書き順を学んだあと、それぞれが自分の考えた「開」を書き、タブレット端末で撮影。



手筆で書いた文字を撮影



「自己批評」した画面を見ながら2枚目の試書



提出作品はロイノート・スクリーンを使い共有、端末で参照できる

■横浜国立大学教育学部附属鎌倉小学校
1875年(明治8年)設立の神奈川県立神奈川尋常師範学校が、92年(同25年)に鎌倉に移転。1904年(同37年)、神奈川県立師範学校附属小学校に。学校教育目標に「自分を高めようとする子」「よりよい社会をつくる子」「広く豊かな心をもつ子」「強くたくましい子」の4つを掲げ、同一敷地内にある同校附属鎌倉中学校とともに、小中一貫教育で「自立に向けてたくましく生きる」児童・生徒の育成に努めている。児童数621人(2022年5月現在)。神奈川県鎌倉市雪ノ下3の5の10。

理解深める「自己」「相互」批評

取り込んだ画像を画面上で見ながら、気をつけた点や、画面で見直してみようとした点や、画面で思った点などを丸や矢印、線、文章で書き込むなどして提出します。「自己批評」と呼ばれる作業で、自ら批評し、修正していくことで、自分の理解を深めることができます。提出された作品は大型モニターに表示されるほか、各自のタブレット端末でも参照できます。全員が共有できます。

実際に書いてみて気づいた点を反映して、2枚目の試書を行います。これも同様にタブレット端末で撮影して提出し、共有します。児童たちは、共有した他の人の2枚目の試書を見て、気になった作品を自分の端末に取り込み、改めた方がよいと思える点や、よかったと思える点など、気づいたことを書き込んで送信します。こちらは「相互批評」という作業。作品の画像に「半紙の中央寄りに書いた方

教育の現場から

ICT 積極的に運用

「漢字の組み立て方の秘密に迫り、実生活にいかそう！」について、荒谷教諭は「文字には法則性がある、それを可視化して自分の中で整理する。たとえば、この文字の組み立ては上下だから、こうすればきれいに見える、といった見方、考え方を日常生活の中で発揮して、書けるようになってもらうのが狙い」と説明。「書写というところ、お手本があって、その通りに書く」というイメージがあります。しかし、お手本をまねするだけでは、練習した文字はうまく書けても、初めて見た文字

自分で書いた文字を自己批評する



児童が意見を付ける相互批評の例



「自己批評」や「相互批評」は、ICTを活用することで、いっその効果を発揮しています。「自己批評」では、コピーができるというデジタルの特性を生かし、自分の作品への書き込みを何度でもやり直すことができます。拡大・縮小をはじめ、色を塗ったり、線を付け加えたりすることも可能で、考えを深

硬筆で開の文字を書く



課題について、意見を出し合いながら解決していく能力を養うことにもつながります。こうしたことが限られた時間の中でできるのは、大きなメリットです。授業の最後は、硬筆で「開」の文字を書いて提出します。実生活では、毛筆よりも硬筆で書くことが多いことから、書写以外の学習や日常生活で、学んだことを生かし、整った文字を書くようにするのが狙いです。今回は「もんがまえ」でしたが、「かまえ」や「たれ」のように外側と内側でできている文字のほか、「林」など左右の部分からできている文字、「雪」や「筆」といった上下でできた文字などでも同じような授業が行われています。文字の仕組みを理解し、字形を整えるやり方が分かれば、初めて見た文字でも整った字形で書くことができるのです。この授業では、感覚的でなく、考えて書くことができるような知識の土台作りを目指しています。

実生活で生きる学びを

データ蓄積 復習に役立つ

は、なかなかうまく書けません。そのときに、組み立ての法則性を知っていれば、それに当てはめて、初見の文字でも字形を整えることができます」と話します。



荒谷教諭

そのために、荒谷教諭の授業では、学んだ文字を「上下」「左右」といった組み立てごとに分類し、それぞれの児童が保存しています。その文字のどこに気をつけて書いたかとい

ったコメントを付けたまま保存できるため、5年生になっても6年生になっても、以前の学習を振り返ることができ、荒谷教諭は1年生の頃からデータをためておけるので、学年をまたいでも、蓄積された知識を参照できます。こういうやり方は、ICTならではのものです。紙ベースでは、なかなか難しいのではないかと、荒谷教諭は話します。ICTを使った授業の効果を実感しています。



声かけのこともできます。自分から発言しない、あまり目立たない子どもたちの作品や文章なども見られるので、そういった子どもにも寄り添った指導もできます。これまでだと見逃されがちだった子どものサポートがやりやすいということも、大きなメリットだと思います。このような取り組みを行う際に背中を押してくださった、横浜国立大学教授の青山浩之先生に深く感謝しています」と話しています。

文字の組み立てごとの分類

直筆の文字

手書き文字は、筆を持った時の心の動きを写し、書き手の人柄や個性、思いなどを伝えます。人を引きつける日本の伝統文化の魅力を、さまざまな分野で活躍する方々に語ってもらいました。
(肩書は取材時)

いけばな草月流 第四代家元 勅使河原 茜氏



てしがはら・あかね 東京都出身。幼稚園教諭を経ていけばなの道へ。2001年第四代家元継承。個性と自由な創造を大切にする草月流のリーダーとして、国内外で作品発表や講習会を開催。いけばなで子どもたちの感性と自主性を培う「茜ジュニアクラス」を主宰する。異分野アーティストとのコラボレーションや「いけばなLIVE」にも力を注ぐ。

草月流は、私の祖父、勅使河原蒼風が1927年に創始しました。蒼風の父、私の曾祖父である華道家・久次に幼い時から指導を受け、その才能を開花させました。が、当時は、定型化したものをつましく真似ることがいけばなであると言われていて、生け手が変わるのになぜ同じ形を作らねばならないのかということに疑問を持ち、新たな流派を興しました。

生け手の個性表れる

もちろん、草月流にも基本的な型はあります。それを習得したうえで、そこからは、それぞれの個性や、自分の表現したいことを、きちんとやっていく。いけばなを通して、自分の思いを形にしていきたいというのが、草月の特徴です。個性を尊重するということです。

私は、植物と向き合い、自分と向き合うことを心がけています。植物は生きていますので、人間の思い通りにはなかなかいきません。それを無理やりいつことをきかせようとすると、できあがった作品には無理があると思うんです。

す。目の前にある植物をどうすれば、一番すてきに見えるのか、生き生きと表現できるのかを見きわめるということですね。

もうひとつ、自分自身と向き合うことですが、いけばなというのは、生け手の個性が出ます。隠そうとしても逆に出るものなんですね。それがあなたなのよ、ということなんです。自分の魅力や、だめなところが発見できる、見抜

人姉妹で、小学校の頃は毎年、書き初めをしていましたが、祖父や父は「この字を書きなさい」とか一切言わない。そうすると、私たちは女の子の絵とか電車の絵とかを筆で描き始めるんですね。楽しんで、やりたいことをやりなさいという、草月の原点のようなどころがありました。私も15年ほど前から墨象に挑戦したり、普通に書いていたりしているんです。

けれど、まだまだ遊び心をもってできないんです。緊張してしまつて。私の書がどういうものか、まだ見つけられていないんです。

いけばなというのは、瞬間的に判断して生けていくのが面白さだと思います。書道も、紙に筆を置いて書く、その瞬間の勝負という面が似ているのではという気がします。文字には人となりが出ますし、人の心が表れてくると思います。手書きの手紙をいたなくと、すごくうれしいですし、私もできるだけ手書きで出せるように心がけています。

フリーアナウンサー 熊谷 麻衣子氏



くまがい・まいこ 宮城県出身。元岩手めんこいテレビアナウンサー。ニュース番組のキャスターやリポーターなどを務める。フリー転身後は、日本テレビ系やフジテレビ系などのバラエティー番組、報道番組のリポーター、アシスタントとして活躍する。書道七段。野菜ソムリエのジュニアマイスター資格や四級小型船舶操縦士免許などを持ち、趣味も多彩。

書道に触れたのは、小学校1年生くらいの時です。私は3人姉妹なんですが、その頃、母親の勧めで、3人とも書道教室に通うことになったんです。でも、当時はどちらかというと「習い事で通わされてる」という意識で、あまり熱心ではありませんでした。公民館みたいなところで教室が開かれていたんですが、私の地元・仙台の冬は寒いんです。冬は、筆を洗うときの水が冷たくて、でも、ちゃんと洗わないと次の時に書けないし、と思って洗ってたんですが、正直、全然楽しくなかったです。それでも、中学校に入ってからいまでは続いています。

時間あれば筆を持つ

大人になって、岩手めんこいテレビ局にアナウンサーとして入社したんですが、当時、ニュースの原稿は、手書きだったんです。ニュース原稿は、自分で現場に行つて取材して書くこともあって、そのとき、報道の仲間に「字がうまいね」「読みやすいね」と言われて、ああ、そうなのか、と。長い

これで終わってたんですが、それは、すごく楽しかったですね。自分から学びたいと思って始めたので。書道に限らず、子どもの時はやりたくなくても、大人になって楽しめる土台になっているということはあると思います。

大人になってから学んだ書道が楽しかったので、時間があれば、筆を持っています。その時は、ちゃんと墨をすって。硯も、宮城県の伝統的工芸品の「雄勝硯」で、

年、習字をしていた土台ができていたのかな、と思いました。そして、写経を体験したり、取材で書道家の方に会ったりすることがあったんですが、書道家の方が、すごく楽しそうに書いておられるのを見て、もう一度やってみようかな、と思って、先生にお願いして、教室に入れていただきました。教室は遠くて、往復3時間くらいかかったんですが、5、6年通いました。その後、先生が教室をたた

これは、父が雄勝町(現石巻市)に連れて行ってくれたことがあって、その時に買ってくれたものです。墨をすっている、何か違う空間に入ってしまったというか、一瞬、別世界に行けるように感じます。私が半紙に向かうのは、何か、1回、頭を空っぽにしたいというか、落ち着きたいと思う時が多いですね。お手本を見て、それを書くことが多いんですが、一人で書いていると止まらなくなつて、気がつけば半紙がなくなつてしまつたということがあります。

私は、人の書いた文字を読むのが好きなんです。ほとんど読めないような字でもいいですし、あるいは上手な文字をほればれしながら鑑賞するのでもいいですね。そんなに上手でない人が、それを自覚しながら丁寧に書いている文字も大好きです。最近、タブレットとかの文字を見慣れたと思いますが、子どもにも、いろいろな人の文字を見てほしい。そうすることで、文字の味わいが分かってくるのではないかと思います。

人の心 反映する

日本書道美術館 理事長・館長
大城 章二 氏



おおしろ・しょうじ 静岡県出身。東京藝術大学彫刻科に入学、同大学院及び研究生として9年間在籍。在学中に第1回久米桂一郎賞、卒業制作展において安宅賞受賞。以来、個展・グループ展を中心に作品発表。2009年ヴェネツィアビエンナーレ(イタリア・ベニス)に出品、その後フィレンツェ、ミラノにて巡回展。13年11月から現職。

作品に学問の裏付けを

当館は、1973年に日本初の書道専門美術館として開館、約半世紀にわたり、名品の蒐集と実践者の育成に尽力してきました。51年開催の「文部省教員免許法認定講習会」参加者を中心に日本教育書道連盟が結成され、正しい書道教育の普及と学校での書道教育の復活、芸術書道の地位向上を目指し活動してまいりましたが、結成20周年事業として書道専門美術館創設を掲げ、全国会員の賛同と賛同の各会派を代表する書家の皆様ほか各方面から寄付を賜わり、ほぼ1年で資金が集まり、建設、開館に至りました。

当館は、特別展と公募展「日本書道美術館展」を開催しています。「館展」は年齢、国籍、所属を問わず誰もが応募でき、選考は、出品者の立場を伏せて公平に行っています。作品本位の評価ですので、キャリアが浅くとも練度の高い作品であれば高い評価を得、たとえ役員でキャリアが長くとも、個性に陥っていれば落選となります。「館展」の最終審査は全て外部審査員をお願いし、書家と他分野の第一線で活躍されている芸術家、研究者など同人数で構成、公開します。審査員は見学者約100名の目前で、自身の評価点を示さなければなりませんので大変です。こうした審査は前例がなく、第1回展から現在に至るまで続けられています。

また、書道の正しい継承のために、教育にも力を注いでいます。日本教育書道連盟が東京大学など学問的な「裏付け」が必要で、それが作品の重みを増すのだと考えます。文字を書くということは、言葉を書くわけですから、創作でも、詩歌の作者や内容、詠まれた状況などを踏まえて書くことで、生身の人間が生み出した生命感が表れてくるのではないのでしょうか。

私の専門は彫刻で、塑像、テラコッタを中心に制作しています。休みの日には、絵画や彫刻、書など色々な展覧会に出向きます。芸術にとって重要なのは生き生きとした表現、生命感です。人の手を介して創造されたものに心に残るもの、訴えかけてくるものがあります。

このたび、館蔵の「承暦二年四月廿八日内裏歌合」が重要文化財に指定されました。およそ1000年も前に書かれたものですが、筆者の息づかいが、漆黒の墨色をおしてこちらに迫ります。手書き文字は、一字一字に書き手の命がこもるものです。手書きの文化を大切に、日常を豊かに過ごしていきたいと思っています。

私の祖母は、書道や詩吟といった伝統文化に通じたひとで、私が書を作り始めたのも、祖母の存在があります。文字を書くことに厳しく、小学生の時から、自分の名前とか、手紙とかを丁寧に書くよう言われていました。年賀状なんかは、字が曲がっていると、横から新しいはがきが出てきて、書き直しをさせられるんです。怒られないように、褒めてもらえるように、と一生懸命書いていました。高校2年で俳優としてデビューして、あまり筆を執ることもなくなっ

芝居と書 客観性必要

たんですが、30歳のときに書道学校で体験授業を受けたんですが、全然できない。高校の授業でも書道を選択していたのに、自分の得意な加減に打ちのめされ、悔しかったのが最初ですね。でも、少しずつ課題ができるようになって、今度はうれしくて。教室では、自宅ではなかなか書けないような大作も書けるじゃないですか。そうすると、書いておもしろいなど。

筆を執って紙に向かうときには、集中はもちろんですが、自分との闘いですね。自分の作品を見て、ダメだなと思うことがほとんどなので、自分と対峙して苦しむんです。その中で、墨をすったり、紙を継ぎ足したりしているの、総じて闘いですね。

役者は、客観性が必要なんです。徹底的に自分を見つめて、自分との対峙の果てに何かが生まれる。これは、何かを表現しようとする時に共通すると思うんです。自己満足では、他人の鑑賞には耐えられません。

いろいろな方々がおっしゃっているのは、書道は自己顕示欲の表れだ。その発露でしかないわけだから、さらけ出すしかないんだ。芝居も、結局はそうなんです。どんな役をやっても、セリフをもらっても、出てくるのは、自分の経験やイメージの中からの。書で表現しようとするの、何かを伝えるという、書のための必要になっていないの、思っています。

俳優
松村 雄基 氏



まつむら・ゆうき 東京都出身。1980年、テレビドラマ「生徒諸君!」でデビュー。以後「不良少女とよばれて」「スクール☆ウォーズ」と出演が続き、80年代には大映ドラマの常連俳優として活躍。その他、映画「恋子の毎日」「悲しきヒットマン」、舞台「女たちの忠臣蔵」、ミュージカル「ロミオ&ジュリエット」など。書道師範の資格も持つ。

第18回 手書き文字ばんざい!

書くって楽しいね



3年ぶり開催

書道を通して手書き文字の楽しさに触れる「第18回手書き文字ばんざい!」が、令和4年10月15日に大阪市中央区のOMMビルで行われました。新型コロナウイルスの感染拡大で3年ぶりの開催となりましたが、幼児から大人まで192人が参加し、「笑顔かがやく明日へ」をテーマに、「笑顔かがやく明日へ」をテーマに、臨書をしたり、カラフルな絵の具でイラストなどを添えた絵馬を作ったりして、手で文字を書く楽しさに触れました。

「笑顔かがやく明日へ」テーマ

手書き文字ばんざい!

読書週間初日の10月27日が「文字・活字文化の白」に制定された2005年、本院と読売新聞社が始め、毎年10月に開催している。

大会は、日本書芸院役員展の魁星作家、森岡郁恵さんの揮毫で始まりました。森岡さんは参加者が見守る中、「未来をつくる」と鮮やかに書き上げ、「こうなったらいいなとか、あなっというより、未来をつくる」という力強い言葉がいなと思ってきました。小さい子どもさん多いですが、可能性がいっぱいあると思うので、いろんな経験をしてみたい、いろんなことに挑戦して、笑顔いっぱい未来をつくるってほしい」と、作品に込めた思いを語りました。



続いて、主催者代表があいさつ。読売新聞大阪本社三村竜太郎・執行役員事業本部長は「きょうは、書くことを楽しんでいただくといいと思います。書くことが大事です。きょうは一日、文字を書くことを楽しんでください」と話しました。また、日本書芸院の木村通子・常務理事・手書き文字部部長は「手書き文字は、書かれた文字の線や形を楽しむものでもあります。上手に書くことと肩に力が入り、うまくいきません。ちょっと集中して、丁寧に、そして時間の許す限りたくさん書いてみてください」とアドバイスしました。

この後、参加者は「幸」「笑」「喜」といった、今回のテーマに沿った手本から好きな文字を選んで、会場に展示する色紙作品の制作に取りかかりました。お父さんやお母さんに見てもらいながら力強く筆を走らせたり、友だち同士でこの作品がいいか話し合う姿が見られました。小学2年生の山本亜蘭さん(8)は、「光」を揮毫。「上手に書けたのでよかったです。習字のお稽古は楽しいです」と笑顔で話しました。毎回参加しているという大山直子さん(44)は「3年ぶりなので楽しい。手書き文字は心を伝えることが出来るので、年賀状はいつも手書きです」と久しぶりの開催を喜び、「一緒に参加した息子の小学4年生、寛太さん(10)は「うまく書けたときは気持ちいい。どんな文字を書きたいです」と話していました。読書の「明」に挑戦したのは、小学3年生の吉野詞春さん(9)。「書いたことのない文字で緊張しました。難しかったけれど、96点くらいかな。お習字は大好きです」とうれしそうでした。このほか、記念品の絵馬にカラフルな絵の具でイラストを描いたり、きれいに塗り分けたりした上に、「ありがとう」「笑顔」などの言葉を揮毫しました。



【主催】公益社団法人日本書芸院、読売新聞社
【後援】文部科学省、大阪府教育委員会、大阪市教育委員会、読売テレビ
【協賛】あかしや、呉竹、サクラクレパス、ゼブラ、トンボ鉛筆、ペンてる、墨運堂(50音順)

情緒豊かに 生き生きと

日本書芸院、読売新聞社主催、文部科学省後援の「第17回全日本小学生・中学生書道紙上展」(令和4年・2022年)は全国から1万2044点の応募があり、各学年の優秀作品「ベスト100」「準ベスト50」が選ばれました。それぞれの結果は、本院ホームページ(<https://www.nihonshogein.or.jp/>)に掲載しています。

日本書芸院、読売新聞社主催、文化庁・兵庫県後援の「第27回全日本高校・大学生書道展」(令和4年・2022年)は、漢字、かな、調和体(漢字・かな交じり

文)、篆刻の4部門に計7998点が寄せられました。最高賞の全日本高校・大学生書道展大賞に55点が選ばれたのを始め、同展賞328点、優秀賞596点が決まりました。入賞作品のうち、大賞と展賞作品は、2022年8月23日から28日まで神戸市中央区の兵庫県民会館で展示されました。感染症対策で授賞式・祝賀パーティーは中止されました。また、展覧会場を360度カメラで撮影し、インターネット上に再現した「VR高大展」を無料公開しました。

第17回 全日本小学生・中学生書道紙上展



【学年別出品数】

小学1年生	602	小学2年生	1100	小学3年生	1770
小学4年生	1879	小学5年生	1786	小学6年生	1761
中学1年生	1168	中学2年生	1099	中学3年生	879

【審査結果】

ベスト100					
小学1年生	100	小学2年生	109	小学3年生	106
小学4年生	102	小学5年生	104	小学6年生	106
中学1年生	108	中学2年生	110	中学3年生	103

準ベスト50

小学1年生	56	小学2年生	65	小学3年生	55
小学4年生	58	小学5年生	58	小学6年生	53
中学1年生	69	中学2年生	66	中学3年生	51

【審査員】

本院理事長	土橋 靖子
本院副理事長	高木 厚人
	山本 悠雲
	中村 伸夫
	吉川美恵子
読売新聞大阪本社 執行役員事業本部長	三村竜太郎

第18回展 作品募集

令和5年8月20日応募〆切
詳しくは日本書芸院ホームページで。



ベスト100受賞作品を掲載した小中展新聞を無料でお届けします。

お申し込みはメール・FAX・お葉書で。希望部数とお届け先を日本書芸院事務局まで。(新聞代・送料とも無料)

第27回 全日本高校・大学生書道展

出品点数 **7998点**

【審査員】

読売書法会最高顧問	高木 聖雨
	星 弘道
本院最高顧問	黒田 賢一
本院名誉顧問	真神 巍堂
本院理事長	土橋 靖子
本院副理事長	高木 厚人
	中村 伸夫
	山本 悠雲
	吉川美恵子
読売新聞東京本社 執行役員事業本部長	山田 隆
読売新聞大阪本社 執行役員事業本部長	三村竜太郎



大賞受賞作品を掲載した高大展新聞を無料でお届けします。

お申し込みはメール・FAX・お葉書で。希望部数とお届け先を日本書芸院事務局まで。(新聞代・送料とも無料)

【審査結果】

個人賞	全日本高校・大学生書道展大賞	55点
	全日本高校・大学生書道展賞	328点
	優秀賞	596点

団体賞・高等学校の部	最優秀校	大分高等学校（大分）
	第2位	岩手県立盛岡第四高等学校（岩手）
	第3位	和歌山県立桐蔭高等学校（和歌山）
	第4位	東福岡高等学校（福岡）
	第5位	和歌山県立和歌山北高等学校（和歌山）
	第6位	開智高等学校（和歌山）
	第7位	徳島県立名西高等学校（徳島）
	第8位	明誠学院高等学校（岡山）
	第9位	奈良県立桜井高等学校（奈良）
	第10位	長野県松本蟻ヶ崎高等学校（長野）
	第10位	鹿児島県立大島高等学校（鹿児島）
		※第10位同点2校

団体賞・大学の部	最優秀校	四国大学(徳島)
	第2位	大東文化大学(東京)
	第3位	京都橘大学(京都)
	第4位	奈良教育大学(奈良)
	第5位	京都教育大学(京都)
	第5位	岐阜女子大学(岐阜)
	第7位	立命館大学(京都)
	第8位	帝京大学(東京)
	第9位	花園大学(京都)
	第10位	大阪教育大学(大阪)
		※第5位同点2校

第28回展 作品募集

令和5年6月15日応募〆切
詳しくは日本書芸院ホームページで。



令和4年 全国シルバー書道展

表現豊かにはつらつと

高齢者世代に、筆を持ち、表現することのよさや楽しさを知ってもらおうと、令和4年の「全国シルバー書展」が、大阪、京都、滋賀など西日本の2府4県で開かれ、幅広い世代の書道ファンらでにぎわいました。その中で、「芸術文化立県」を掲げ、芸術文化で人や地域を元気にし、未来を開く社会の実現を目指している兵庫での書道展を紹介します。

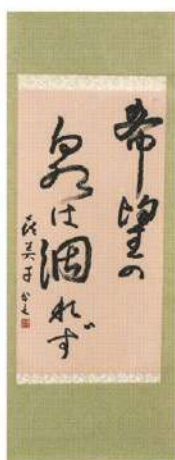


多くの来場者でにぎわった兵庫展

柔らかな筆遣いの野原一伸さん(93)の作品



繊細な表現の丸山喜美子さん(94)の作品



力強い伊坂翠琴さん(94)の作品



第35回兵庫展は令和4年10月22、23の両日、神戸市灘区の前田の森ギャラリー(県立美術館王子分館)で開かれました。出品は、漢字、仮名など計370点。男性75点、女性295点。特別出品として、齋藤元彦兵庫県知事と久元喜造神戸市長の作が展示されています。

ファミリー展も同時に開催

兵庫展

会場には、夫婦や友人同士のグループ、家族連れらが来場。自分の作品の前で立って写真を撮ってもらったり、参加する教室の先生の作品に耳を傾ける人らでにぎわいました。

品も展示されました。男性の最高齢は93歳の野原一伸さん(尼崎市)、女性はいずれも94歳の、伊坂翠琴さん、丸山喜美子さんのお二人でした。野原さんは、欧陽脩の漢詩「遠山」を、ベタランならではの手慣れた柔らかな書体で書き上げました。伊坂さんは、力強い筆遣いで「希望の泉は涸れず」としたためました。また、丸山さんは、紙に扇面を描き、その中に、遣唐使の母が旅立つ息子に贈った万葉歌を繊細な表現で書きました。



私たちは「日本の書道文化」のユネスコ無形文化遺産登録を応援しています。

家族や学校、高齢者施設の仲間などが出品する、第19回「心をつなぐファミリー書展」も同時に開催され、3597点の作品が並びました。会場には「姉妹」「兄弟」「和」「絆」といった作品が並び、それぞれに込められた思いが伝わってきました。運営に当たった、日本書芸院の理事で兵庫書作家協会第三展覧会部長の小橋流燕さんは「コロナ禍で出品者が減っていました。今回は、色紙を使うなど、見せる工夫をされた作品が目立ちました。シニア世代の方々はこの展覧会を楽しみに、力を入れてくださる方も多く、ますます発展させていければ」と話していました。

令和5年(2023年)「全国シルバー書道展」

第35回広島展	1月21日(土)～22日(日)	広島県民文化センター
第36回大阪展	1月31日(火)～2月1日(水)	OMMビル2階Cホール
第36回三重展	2月22日(水)～25日(土)	三重県文化会館
第36回京都展	3月3日(金)～5日(日)	京都文化博物館5階全室
第36回滋賀展	4月28日(金)～30日(日)	大津市歴史博物館
第35回奈良展	9月5日(火)～10日(日)	奈良市美術館
第36回岡山展	9月19日(火)～24日(日)	岡山県天神山文化プラザ
第36回兵庫展	10月21日(土)～22日(日)	前田の森ギャラリー
第22回和歌山展	10月26日(木)～29日(日)	和歌山県民文化会館

※和歌山展は隔年開催

伝統と創意

公益社団法人 日本書芸院

広報紙「書くよろこび」を無料でお届けします

「書くよろこび」は、書くことのよろこびや楽しさを広く一般の方にアピールし、書写書道のより一層の振興と発展を目的とした無料の広報紙です(年1回発行、50万部)。書道教室や部活動、展覧会場など、書や文字に関する様々な場面で配布、活用していただいています。送料無料でお届けいたしますので、ご希望の部数と送付先を日本書芸院事務所へお申し込みください。お待ちしております。



沿革と概要

昭和21年(1946年)11月創立
昭和22年(1947年)5月、社団法人の認可を受ける
平成22年(2010年)6月、公益法人制度改革により、内閣府から公益社団法人の認定を受ける
平成28年(2016年)創立70周年
■現在、北海道から沖縄まで全国に9000人を超える会員を擁する我が国屈指の書道団体であり、会員の中から、文化勲章受章者3名(故村上三島、故杉岡華郎、故高木聖鶴)をはじめ文化功労者、日本藝術院会員、日本藝術院賞受賞者、日展や読売書法展など全国規模の大公募展の役員・審査員を務める著名な書道芸術家を多数輩出しています。
■毎年、公募を含めた書展や企画展、各種の講習会・講演会を開催しています。

■展覧会

＜日本書芸院展＞

日本書芸院会員相互の共励琢磨による「書」の本質的研究を通して、後進の育成に尽力しています。

●日本書芸院展(役員・役職者展) 会場：大阪国際会議場(大阪市北区)

●日本書芸院(四月展・五月展)※令和5・6年は会場が改修工事のため開催しません

＜その他の企画展＞

小学生からシルバー世代まで、全世代を網羅する書道展を開催し、書の啓蒙と普及、我が国文化の継承・振興・発展のために活動しています。

●全日本小学生・中学生書道紙上展 読売新聞紙上および小中展新聞紙上

●全日本高校・大学生書道展 会場：原田の森ギャラリー(神戸市灘区)

●全国シルバー書道展 近畿2府4県および三重・岡山・広島県で開催

■講習会

- 記念講座
- 教養講座
- 「手書き文字ばんざい！」(文字・活字文化の日記念イベント)

■出版

- 作品集・図録・DVD
- 会報
- 研究誌・記念誌
- 広報紙
- 小中展・高大展新聞